

ルーマニア語の属格について

Daniela CALUIANU

はじめに

ルーマニア語は、ロマンス諸語の中でラテン語の格曲用を受け継ぐ唯一の言語である。しかしラテン語に比べて、格体系はかなり変化している。その特徴として、次の三つの点を指摘することができる。

(1) ラテン語の六つの格形式はルーマニア語では三つの個別形式に減少した。

(Nom-Acc, Gen-Dat, Voc)

(2) 格を示す役割は、冠詞に移りつつある。女性名詞単数の Nom-Acc と Gen-Dat 以外に名詞には格屈折がない。

(3) ルーマニア語にも、格関係を表すには、屈折以外の手段を用いる傾向が見られる。(語順や前置詞)

以下に具体例を挙げておく。

A. baiat (男の子、男性名詞)

	単数	定冠詞	複数	定冠詞
Nom	baiatu	l	baieti	i
Acc	baiatu	l	baieti	i
Gen	baiatu	lui	baieti	lor
Dat	baiatu	lui	baieti	lor
Voc	baiatu	le	baieti	lor

B. fata (女の子、女性名詞)

	単数	定冠詞	複数	定冠詞
Nom	fat	a	fete	le
Acc	fat	a	fete	le
Gen	fete	i	fete	lor

	単数	定冠詞		複数	定冠詞
Dat	fete	i		fete	lor
Voc	fat	o		fete	lor

- (1) Baiatul alearga.
男の子Nom 走る
男の子が走る。
- (2) a Mama vede baiatul.
母 見る 男の子 Acc
b Mama il vede pe baiat.
clit (acc) prep acc
母は男の子を見る。
- (3) a Mama (ii) da o carte baiatului.
母 clit (Dat) 上げる 不定冠詞 本(Acc) 男の子(Dat)
b Mama (ii) da o carte lui George.
母は(a)男の子に、(b)ジェオジェ君に本を上げる。

1. 属格と与格

ロマンス諸語の中で、ルーマニア語の特徴は属格と与格が同一の形態で表されることである。(これはルーマニア語における俗ラテン語の独特な変化であるか、それともバルカン Sprachbund の影響によるものとして見た方がよいかは議論の余地がある)。属格／与格の形態的同一性に加えて、統語的・意味的な共通点があると論じて、現代ルーマニア語における属／与格の区別は意義を失っていると主張する研究者もいる (Manea, 1989)。本節では属／与格同一性論の論証を考慮しながら、ルーマニア語における属格／与格の位置づけについて検討してみたい。

1.1. 形式

属格／与格の形態的同一性は名詞に限らず、格変化を起こすあらゆるカテゴリー(代名詞、指示詞、数量詞、形容詞、冠詞)に見られるものである。ただし、人称代名詞の一・二人称は例外で、属格と与格の形が異なっている。

- | | |
|------------|------------|
| (4) Gen | Dat |
| meu (私の) | mie (私に) |
| tau (あなたの) | tie (あなたに) |

Gen	Dat
nostru (我々の)	noua (我々に)
vostru (あなたたちの)	voua (あなたたちに)

代名詞の格体系は、名詞等の格体系と別扱いしない限り、属格／与格統一論での説明は困難であろう。

1.2. 限定詞：所有冠詞

学校文法では、属格と与格を区別するテストとして「所有冠詞」を伴う可能性の有無を問題にする。次の例(5)が示すように、属格の場合は、主要部名詞が定冠詞以外の要素に限定されるとき、または、属格名詞とその主要部の間に異なる要素が挿入されたとき、「所有冠詞」が用いられるのに対して、与格名詞句の場合は、文脈が名詞の限定詞に影響を与えることはない。

- (5) a Dau cartea noua baiatului.
 上げる 本(定冠詞) 新しい 男の子(Dat)
 男の子に新しい本をあげる。
- b Am vazut cartea noua a baiatului.
 見た 本(定冠詞) 新しい 所有冠詞 男の子(Gen)
 男の子の新しい本を見た。
- c Dau o carte baiatului.
 上げる 不定冠詞 本 男の子(Dat)
 男の子に本を上げる。
- d Am vazut o carte a baiatului.
 見た 不定冠詞 本 所有冠詞 男の子(Gen)
 男の子の本を見た。
- e Dau cartea baiatului.
 上げる 本(定冠詞) 男の子(Dat)
 男の子に本を上げる。
- f Am vazut cartea baiatului.
 見た 本(定冠詞) 男の子(Gen)
 男の子の本を見た。

「所有冠詞」の構造や用法などは、属格名詞句構造を明らかにするために重大な手がかりになると思われるので、以下でさらに詳しく考察することにする。

1.2.1. 「所有冠詞」 (PA) は統語的に所有句に属する。これは句を修飾する副詞 numai (だけ) の振る舞いによって理解される。つまり numai は所有冠詞と名詞の間に挿入できず、PAによって限定される名詞句を一まとまりとして修飾するのである。

- (6) a [o carte] [a baiatului]
 不定冠詞 本 所有冠詞 男の子 (Gen) 男の子の一冊の本
 b [nuami [o carte]] [a baiatului] 男の子の一冊の本だけ
 c *[o [numai] carte] [a baiatului]
 d [o carte] [numai [a baiatului]] 男の子だけの一冊の本
 e *[o carte] [a [numai] baiatului]

1.2.2. PAは主要部名詞と呼応する。

- (7) a o carte a baiatului
 不定冠詞 本 (女・単) PA (女・単) 男の子 (男・単)
 b un prieten al baietilor
 不定冠詞 友達 (男・単) PA (男・単) 男の子 (男・複)
 c doi prieteni ai baiatului
 二人 友達 (男・複) PA (男・複) 男の子 (男・単)

1.2.3. 主要部名詞が省略された場合、所有冠詞が代名詞のような働きをする。

- (8) a Am vazut cartea fetei si a baiatului.
 見た 本 (女・単) 女の子 と PA (女・単) 男の子 (男・単)
 b Am vazut cartile fetei si ale baiatului
 見た 本 (女・複) 女の子 (女・単) PA (女・複) 男の子 (男・単)
 女の子と男の子の本を見た。

1.2.4. 所有冠詞は、主要部名詞の定冠詞に隣接する位置には現れない。しかし所有部名詞が定冠詞以外に後置修飾詞を伴う場合は所有冠詞が用いられることは、この二つの冠詞に関する制限が構造的なものであって、意味的なものではないと考えられる。

- (9) a *cartea a baiatului
 本+定冠詞 PA 男の子(gen)
 b cartea frumoasa a baiatului
 本+定冠詞 美しい PA 男の子(gen)

c cartea baiatului
 本+定冠詞 男の子(gen)

本稿の冒頭で言及したように、ルーマニア語においては、格変化を表示する役割が名詞から冠詞に移った。例文(9)に見られるように、主要部名詞の定冠詞が意味的な役割のほかに修飾名詞の属格を許容する働きも行っていると思われる。所有冠詞は定冠詞の代用として用いられると考えるならば、例文(9-a,b,c)における構造上の相違は簡単に説明できる。(9-a)では所有冠詞が *redundant* であるために文が非文法的になる。(9-b)の場合は、主要部名詞が定冠詞を伴っているが、その定冠詞と修飾名詞句の間に形容詞があるので、定冠詞が修飾名詞の属格を許容できない。表現の文法性を救うために定冠詞が修飾名詞直前の位置に複写される。定冠詞と属格の間に極めて形式的な関係があることが固有名詞の振る舞いによって理解される。定冠詞と同じ音声でおわる固有名詞は所有冠詞を伴わないが、そのほかの固有名詞はPAをとる。

- (10) a "Ion" al lui Rebreanu
 b "Greuceanu" lui Ispirescu
 c "Ofelia" lui Shakespeare
 d "Carmen" a lui Bizet

(10-a-d) の例がいずれも作者名 (Rebreanu, Ispirescu, Shakespeare, Bizet) とその作品の主人公名の所有表現であるけれど、(10-b,c) の例では主人公名の語尾は定冠詞と同音なので、所有冠詞が用いられない。(10-a,d) の例は固有名詞が子音で終わっているので所有冠詞を要求する。一方、所有冠詞は形式的側面では、所有表現の *well-formedness* を確保する働きを持ち、もう一方では、意味的に定冠詞の役割を果たす。1.1.2.1.で示したように、所有冠詞は修飾名詞句に属する。主要部名詞が省略されるとPAを伴う属格句が *definite expression* と解釈されることが、所有冠詞が定冠詞の一種であることを表している。

- (11) a O carte a profesorului este pe masa si o carte
 不定冠詞 本 PA 先生(gen) ある 上に 机 と 不定冠詞 本
 a elevului este pe raft.
 PA 学生 (Gen) ある 上に 棚
 先生の一冊の本が机の上であって、学生の一冊の本が机の上にある。

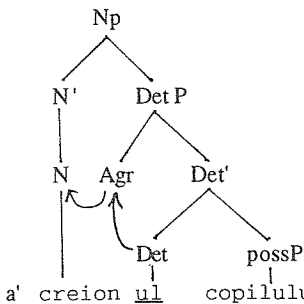
b O carte a profesorului este pe masa si ____ a elevului
[def, *indef]

este pe raft.

先生の一冊の本が机の上であって、学生の本が棚の上にある。

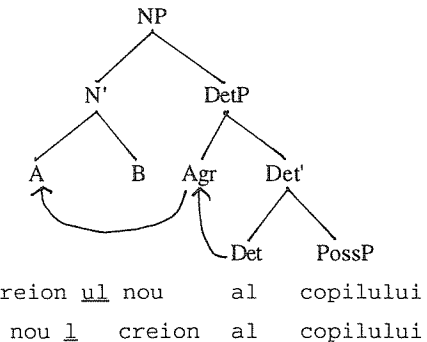
所有冠詞の特徴を考慮にいと、ルーマニア語の属格名詞句は(12)のような構造を有すると考えられる。

(12) a



子どもの鉛筆

b



子どもの新しい鉛筆

定冠詞(Det)はAgrを通して、主要部名詞(N)の語尾に付着する(12-a)。主要部名詞句は複数の要素を含む場合(12-b)、定冠詞は一番左の要素に付着する。定冠詞と属格名詞(PossP)の間にc-command(I)の関係が必要であると仮定すれば、(13)の構造が非文法的であると予測できる。

(13) a *creionul nou copilului
鉛筆 定冠詞 新しい 子ども(gen)

b *noul creion copilului
新しい+定冠詞 鉛筆 子ども(gen)

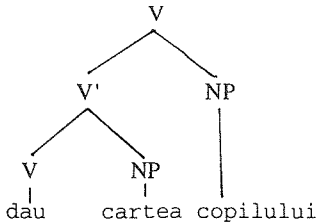
子どもの新しい鉛筆

(12-b) ではAの位置にある要素が PossP をc-command できない。従って文法的な構造を設けるために、PossP をc-command できる位置に定冠詞と同じ機能を持つ要素を挿入する必要がでてくる。それが所有冠詞の果たす役割である (12-b)。

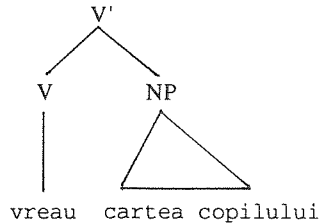
定冠詞によって許容される属格と違って、与格は動詞から付与される。(14-b)のように表層構造では与格と属格が構造的に同一に見える例があるにもかかわらず、実は相違点がすぐに現れ、このふたつの格は根本的に異なるものであることが理解される(14-c-d)。

- (14) a Dau cartea copilului.
 上げる 本 子ども (dat)
 b Vreau cartea copilului.
 ほしい 本 子ども (gen)
 c Dau cartea noua copilului.
 新しい 子ども (dat)
 d Vreau cartea noua a copilului.
 子ども (gen)

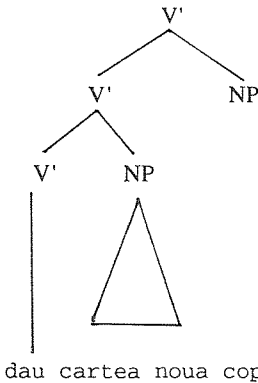
(14') a



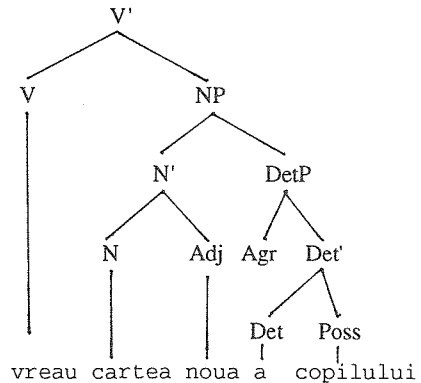
b



c



d



本節では、属格と与格が形式の面では異なる構造を持っていることを示した。次

に両格の相違を機能の観点から考察してみたい。

1.3. 属格／与格の機能

伝統文法では、属格と与格の基本的な機能を次のように分類する。

- (i) 属格：名詞修飾 (noun attribute)
- (ii) 与格：（動詞の）間接目的語 (indirect object)

この分類は、属格が名詞を修飾する機能を持っているのに対して、与格の機能は動詞を修飾することであると示している。しかしこの基本的な規則に違反する例があれば、属格と与格を区別する理由は希薄となる。実際、属格／与格同一論者は (15) のような例文に基づいて、属格と与格には機能的混合が見られると主張する。

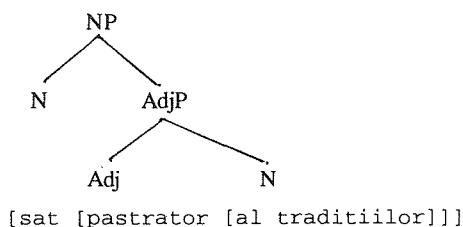
- (15) a sat pastrator al traditiilor
村 固守的 PA 伝統(gen)
伝統を固守する村
- b tinar iubitor al artelor
若者 愛好者 PA 美術(gen)
美術を愛好する若者
- c decernarea Premiului Nobel candidatului
授与 ノーベル賞(gen) 候補者(dat)
候補者にノーベル賞を授与すること
- d impartirea de bomboane copiilor
配布 P あめ 子ども(dat)
子どもに飴を配ること。

(15-a,b)では属格名詞が主要名詞の sat, tinar を修飾せず、形容詞の pastrator, iubitor を修飾する。従って伝統文法の規則によれば、このような属格名詞が attribute として働くのではなく、complement の役割を果たすと思われる。(15-c,d) の与格名詞が動詞の間接目的語という働きはしないで、名詞の decernarea, impartirea を修飾するので、伝統文法によって、attribute と分析することになる。以下では(15)のような構造について考察し、属格、与格の基本的な機能から逸脱するかどうかを検討したい。

1.3.1. 形容詞を修飾する属格名詞

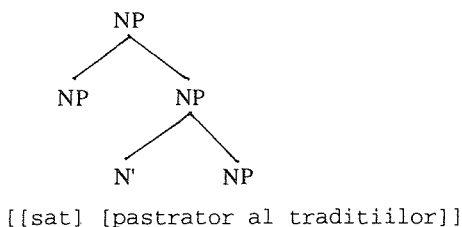
伝統文法は、(15-a,b) のような例をおそらく次のように分析するだろう。

(16)



しかし[形容詞－属格名詞]の連鎖の統語的、語彙的特徴を考えると、(16)の構造より、(17)のような構造が適切ではないと思われる。

(17)



即ち(15-a,b)が同格構造であると解釈したほうがいいのではないと思われる。その根拠は具体的に次の四点である。

- (i) このような構造における形容詞が動詞から派生された名詞と同型のものに限られている。

(18)	動詞	名詞	形容詞
a	pastra	pastrator	pastrator (固守する)
b	iubi	iubitor	iubitor (愛する)

- (ii) 主要部の形容詞が動詞／形容詞修飾要素ではなく、名詞修飾要素を伴う。

- (19) a *sat cel mai pastrator al traditiilor (最上級決定詞)
b sat bun pastrator al traditiilor (形容詞＝よい)

(iii) (15-a,b) に対応する普通名詞の同格構造がある。

(20) un student profesor al varului meu
学生 先生 いとこ(gen) 私

私のいとこの先生である学生

(iv) 属格名詞は省略された場合、「形容詞」が主要部名詞を修飾できない、あるいはその意味が変わってくる。

(21) a un sat pastrator al traditiilor
b *un sat pastrator
c un tinar iubitor al artelor (美術を愛好する若者)
d un tinar iubitor (あいそのいい若者)

動詞から派生された名詞／形容詞は同じ形式を持っているが、意味的には異なるので、(21-a, c) の例のように、伝統文法では形容詞扱いのものが、(21-b,d) のように、形容詞を要求する構造では用いられないか(b)、意味解釈が異なる(d)。

以上のような事実が、(15-a,b)の構造が属格と与格の機能の混合を支持する根拠にはならないことを示しているといえる。

1.3.2. 名詞を修飾する与格

現代ルーマニア語では、名詞修飾与格は、二重目的語動詞の名詞化構造に限られている。表層構造では主要部名詞が属格と与格のふたつの名詞句によって修飾されるが、そのふたつの名詞句と主要部の関係が同じレベルの同じタイプの関係ではないことを明かにしてみたい。

(i) ルーマニア語の語順はかなり自由であるにもかかわらず、(15-c,d)の構造においては語順が固定している。

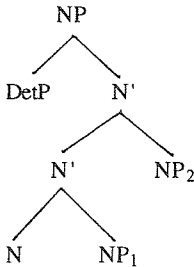
(22) a decernarea Premiului Nobel candidatului
b *decernarea candidatului Premiului Nobel

(ii) 与格の修飾語は、省略されても表現の文法性に影響を与えないが、属格名詞が省略され、与格名詞だけ残された場合、非文法的な表現となる。

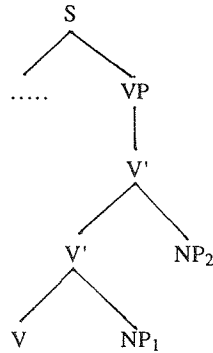
- (23)a decernarea Premiului Nobel
 b *decernarea candidatului

例(15-c,d)は次のように分析すれば、(i)(ii)の制限が説明できると思われる。

(24) a



b



NP₁ (24-a,b) は、名詞句とそれの基になる動詞句の構造を表示したものである。NP₂ が与格名詞で、NP₁ が属格、または、動詞句の場合は対格名詞である。(24)の図式は名詞化の際、動詞句における階層構造がそのまま保留されるという仮定に基づく。語順に関する制限の理由は、この階層構造によるものと思われる。動詞文の場合は、iのような制限が見られない。それは、名詞文と動詞文の間に構造的な違いがあるからではなく、Williams (1982)、Zubizarreta (1987) などに指摘されたように、名詞句の統語が動詞より固定しているからである。従って動詞文に適用できるあらゆる操作が名詞文の中でも適用されとは限らない。

さらに、属格名詞と与格名詞の意味的役割について考えてみると、このふたつの格を区別すべきであると認めざるをえない。属格名詞がいろいろな意味役割を担うのに対して、与格名詞の果たす意味役割は、常に受益者である。

- (25) a cumpararea masinii 車の購入
 購入 車(gen)=対象
 b bucuria copilului 子どもの喜び
 喜び 子ども(gen)=経験者

上のような違いは、GB理論における構造格 (structural case) と固有格 (inherent case) の区別を用いて説明できる。主要部に一番近い名詞句は構造上、基の意味役割とは関係なく表層構造で格が付与される（主要部が名詞である場合は属格、動詞の場合は対格）。受益者という意味役割を担う動詞は与格を与える特徴を持っている。この場合は格付与が名詞化以前、すなわち、深層構造の段階に行われる。そのため、動詞文と名詞文においても同じ格が与えられることになると思われる。

ここまでルーマニア語における属格と与格の区別が形式的側面、また統語的側面においても必要であることを論じた。

2. 属格と部分格

ルーマニア語の属格は屈折属格と前置詞属格の二種類があるとされる。

- (26) a clanta usii
取っ手 戸(gen)
b clanta de usa
取っ手 P 戸
c urechea pisicii
耳 猫(gen)
d ureche de pisica
耳 P 猫

しかしこの二種類の属格の使用制限を調べてみると、多くの場合は、両方の表現が可能ではあるが、形態格と前置詞格とでは、意味的にも統語的にも異なっていることが理解される。

- (27) a pisica copilului
b *pisica de copil
子どもの猫

- (28) a un pahar de apa
b *paharul apei

グラスいっぱいの水

(29) a pisica de munte

b ?pisica muntelui

山猫

(30) a casa de piatra

b *casa pietrei

石造りの家

(27)の例で分かるように、属格の一番基本的な用法は所有関係であり、これは前置詞表現で表すことができない。それに対して、全体／部分の関係(28)、出所(29)、材料(30)など所有格の中心的な用法から離れた意味役割は形態格ではなく、前置詞表現によって表される。(26)のように両方の表現が可能な場合でも、前置詞表現は所有関係ではなく、付属関係を表す。このふたつの表現は、形式的にも、意味的にも異なる構造を持っており、同じ格の標識として扱うのは難しいと思われる。そこで形態格を「所有格」、前置詞表現を「部分格」と呼ぶことにする。以下では部分格が現代ルーマニア語の格体系において、どんな位置を占めるかについて考察してみたい。第一章では、genitive の訳語として「属格」という用語を用いてきたが、実際のところ、内容的にはここで「所有格」と名付けた形式について論じてきたというわけなのである。

2.1. 部分格と限定詞

2.1.1. 主要部名詞の限定

前章ではルーマニア語の所有格が主要部名詞の定冠詞に licence されることを示した。それに対して、部分冠詞の場合にはこのような制限はみられない。主要部名詞の限定詞選択は修飾名詞の形式には影響を与えないのである。

(31) a pahar de apa

グラス P みず

b paharul de apa

名詞 定冠詞

c un pahar de apa

不定冠詞 名詞

d un pahar mare de apa

不定冠詞 名詞 形容詞

2.1.2. 所有格の場合は、修飾名詞の限定に関する制限がなかった、部分格の場合は、基本的に修飾名詞が裸名詞または名詞＋形容詞に限っていて、冠詞類の限定詞が許されない。

- (32) a pahar de vin
 グラス ワイン
 b *pahar de vinul
 名詞＋定冠詞
 c ?*pahar de un vin
 不定冠詞

(32-c)での疑問符は、文が不自然であることには変わりないが、それでも(32-b)よりわずかに容認しやすいものであることを示している。このような制限は部分格を有する言語（フィンランド語など）における "indefiniteness effect" に似ていると思われる。ただし、上の名詞表現だけをみると、それが構造の問題なのか、意味の問題なのかはにわかに判断しかねるところである。全体／部分、材料、出所、属性関係を表す名詞修飾のほか、動詞修飾の部分格表現もある。ラテン語で属格補語をとる動詞のクラスに対応するルーマニア語の動詞は（語源とは無関係に）部分格を要求する傾向がある。de はほとんど意味がないので、ふつうの前置詞より、むしろ格標識として扱うのが適切であろう。

(i) 記憶動詞： a isi aminti（思い出す）； a uita（忘れる）

- (33) Imi aduc aminte de copilarie
 思い出す P 子どもの時代
 子どもの頃を思い出す。

(ii) 感情動詞： a ii fi mila（かわいそうと思う）； a se rusina（恥じる）；
 a se cai（後悔する）

- (34) Mi-e mila de animale
 かわいそう P 動物
 動物がかわいそうと思う。

(iii) 「司法」動詞： a acuza（告訴する）； a absolvi（許す）； a suspecta（疑う）

- (35) Te acuz de furt
 告発する 窃盗

あなたを窃盗のかどで告発する。

(iv) 売買、評価動詞：a cumpara (買う) ; a vinde (売る)

(36) Cumpar cafea de 10 lei

買う コーヒー P 10レイ

10レイ分のコーヒーを買う。

動詞修飾の場合も、前置詞 de の後に定冠詞を伴う名詞は許されない。

(33') *Imi aduc aminte de copilaria

名詞 定冠詞

(34') *Mi-e mila de animalele

名詞 定冠詞

(35') *Te acuz de furtul

名詞 定冠詞

しかし固有名詞の振る舞いを見るかぎり、部分格と定冠詞の共起制限が所有格の場合とは違っていて、音声レベルの制限ではないと思われる。(形式上、定冠詞と同型の語尾を持つ固有名詞が上の動詞の補語として現れる。)

(33'') Imi aduc aminte de Maria

(34'') Mi-e mila de Maria

固有名詞が使われることは、部分格と definiteness の間には意味的な制限がないことを示している。部分格名詞が、定冠詞のほかに、形容詞、前置詞句などの修飾語を伴う場合、定冠詞の存在は問題にならない。(フィンランド語などに見られるような意味的な indefiniteness effect があれば、修飾語の増加によって文法性が高まるとは考えにくい)。

(37) a Imi aduc aminte de casa din padure.

思い出す P 家+定冠詞 P 森

森の中の家を思い出す。

b Mi-e mila de animalele bolnave.

かわいそう P 動物+定冠詞 病気

病気の動物がかわいそう。

c Te acuz de furtul diamantelor.

告発 P 窃盗+定冠詞 ダイヤモンド(gen)

(あなたを) ダイヤモンドの窃盗で告発します。

(33)-(36)の動詞はde格をとるという点において、一つのクラスを成しているように見えるが、より詳しく観察すると、微妙な意味的な違いに気づく。例えば、記憶動詞が +specific の補語を要求するのに対して ((33)における名詞 copilarie が必ず話者の子供時代を示す) (ii)と(iii)の動詞にはこのような意味特徴が見られない ((35) vs (37-c))。この現象の追求は今後の研究課題とし、前置詞deと冠詞の間の共起制限の問題に戻る。以上で見たように、この制限は音声レベルのものでも、意味レベルのものでもない。しかし、(32-b)の非文法性を説明するために、どこかのレベルで制限を設ける必要がある。

(37) b Mi-e mila de animalele bolnave.

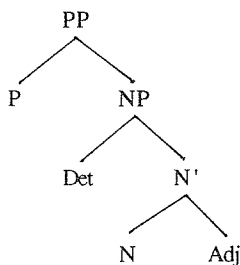
かわいそう P 動物+定冠詞 病気

(38) *Mi-e mila de animalele

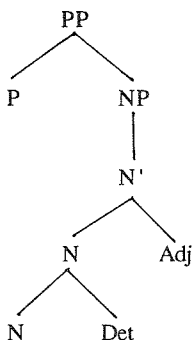
かわいそう P 動物+定冠詞

(37-b)と(38)の深層／表層構造を比べてみると、表層構造では、(38)の場合では定冠詞が前置詞をc-commandするのに対して、(37-b)ではc-commandしないことが分かる。したがって(32-b)、(38)の非文法性は表層の構造上の制限に起因すると考えられる。(実際の構造は以下の図式よりかなり複雑であると思われるが、ここでは技術的な詳細は省略する)。

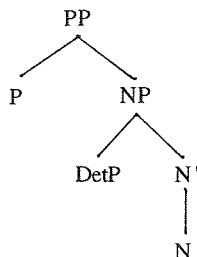
(37)b 深層構造



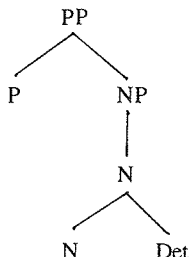
表層構造



(38) 深層構造



表層構造



以上、所有格と部分格の意味的及び統語的相違について並行的に考えてきたが、構造と意味との間に相互関係があると思われる。格の構造的な制限が意味解釈にどのような影響を与えるか、または意味構造が統語構造にどのように反映されるかという問題が今後の研究によって説明されなければならない、重要な課題であると思われる。

3. おわりに

ルーマニア語は他のロマンス諸語から離れ、異なる類型の言語の影響を受けながら、独自の道を歩んできた。その格体系には揺れがみられる。一方ではラテン語から受け継いだ屈折格が名詞からほとんど消え、その機能はおもに冠詞に転移した。それと同時に、格関係は語順と前置詞によって表されるようになり、同じ格に対してふたつの標識手段が存在することもある（対格、属格の屈折形と前置詞形）。もう一方では、形式面における変化が意味解釈のレベルまで影響を及ぼすようになった。つまり新しい形式と以前から残っている形式が共存することによって、それぞれに対応するふたつの異なる意味解釈が行われるようになったのである。属格(genitive)の場合はこういう現象が特にはっきりと見られる。屈折形が所有関係を表すのに対して、前置詞形が部分関係を表すのである。

註

(1) c-command :

Node A c-commands node B iff : a) A does not dominate B and B does not dominate A ; and b) the first branching node dominating A also dominates B (Reinhart 1981).

参考文献

- Anderson, M (1984) "Prenominal genitive NPs", *The Linguistic Review* 3
- Belletti, A (1988) "The case of unaccusatives", *Linguistic Inquiry* 19
- Chomsky, N (1970) *Remarks on Nominalization*
----- (1981) *Lectures on Government and Binding*
- Dumitrescu, A (1988) "Evolution of the noun phrase in present day Romanian and English",
Revue Roumaine de Linguistique, (RRL) 3
- Grimshaw, J (1990) "Argument structure", *Linguistic Inquiry Monograph* 18
- Manea, D (1989) "La relation genitif-datif en roumain contemporain", *RRL* 4
- Williams, E (1981) "Argument structure and morphology", *The Linguistic Review* 1
----- (1982) "NP Cycle", *Linguistic Inquiry* 13
- Zubizarreta, M, L (1987) *Levels of representation in the lexicon and in the syntax*